平成13年度長崎大学・英語基礎学力診断テスト

— その実施と結果分析 —

稲毛 逸郎* 川島 浩勝**

(平成13年10月31日受理)

English Proficiency Test for Nagasaki University Students (2001)

— A Statistical Analysis of the Test Scores —

Itsuro INAGE,* Hirokatsu KAWASHIMA**

(Received October 31, 2001)

1. はじめに

本調査は、平成11年度・平成12年度に引き続き、全学教育（英語）担当の英語教官（常勤・非常勤）の協力を得て「平成13年度英語基礎学力診断テスト」を実施し、¹長崎大学全学教育（英語）を受講する1・2年生の英語基礎学力を客観的に把握することをその目標としたものである。

2. 調査概要

本調査では、高等学校学習指導要領に基き、高等学校・文部省検定済英語教科書の言語材料として用いられている基本的語法・文法事項がどれだけ定着しているのかを、英語基礎学力の目安として測定する。

2.1. 調査内容

現行の学習指導要領に基き、高等学校までに習熟すべき基本的文法事項に関して、先ず、総合的定着度を調べ、次に、それらの相対的定着度を明らかにする。

2.2. 調査対象

調査対象は、教育学部、経済学部、医学部、歯学部、薬学部、工学部、水産学部在籍の1・2年生（任意の対象クラス）412名である。

*長崎大学教育学部英語教育講座

**長崎外国語短期大学

2.3. 調査時期

調査時期は2001年5月～6月である。

2.4. 調査項目・形式の選定

本調査の調査項目とした言語材料は、全て、高等学校・文部省検定教科書から採用し、²表1に示すように、文型をはじめとして12の文法項目を調査対象とした。

また、調査形式は、全て客観問題とし、1. 英文中の空所を4つの選択肢から1つ選んで補充させる解答形式(20問)、2. 英文中の下線部の語について、文脈にあった適切な形に変化させる形式(10問)、3. 英文中の4つの下線部のうち、誤った表現を含むものを1つ選ばせる形式(10問)、4. 与えられた語句が適切な意味を表すように並べかえる形式(10問)の4つのタイプで、総計50問である。

表1に、12の文法項目とそれぞれの項目に対応する問題番号を示す。

表1：調査対象文法事項・問題番号

対象文法事項	問題番号
1. 文型 (sentence patterns)	43, 47, 48, 49, 50
2. 時を表す表現 (tense and aspect)	24, 26, 27, 28, 30
3. 動名詞 (gerunds)	22, 29, 39
4. 不定詞 (infinitives)	40, 41, 45
5. 現在分詞・過去分詞 (participles)	21, 25, 34, 36, 38
6. 助動詞 (modal auxiliaries)	2, 12, 14, 19
7. 仮定法の表現 (subjunctives)	31, 33, 35
8. 比較の表現 (comparative constructions)	23, 32, 37
9. 関係詞 (relatives)	6, 8, 9, 11, 15, 18
10. 前置詞 (prepositions)	1, 5, 7, 10, 17
11. 接続詞 (conjunctions)	3, 4, 13, 16, 20
12. 特殊構文 (marked constructions)	42, 44, 46

2.5. 調査手順

調査は長崎大学・全学教育における通常の授業(90分)の中で実施し、被調査者は調査目的(授業の評価には全く関係ないこと、英語の基本的語法・文法知識の定着度を調べること等)を聞いた後、調査用紙の問題を解き、その解答をマークシートに記入した。なお、調査時間は、過去2回の調査と同様に、30分に設定した。

3. データの集計・処理・分析と考察

3.1. データの集計・処理

カテゴリカル・データとして正解で1、不正解ならば0で、各問題毎に集計・処理を行った。³ 次の表2は、2値型カテゴリカル・データ（1 or 0）を間隔・比率尺度データとして再処理（各問題において正解なら2点、また不正解なら0点とし、50題全問正解で100点とする）し、調査対象者（412名）に関して平均点・標準偏差・最高点・最低点を求めたものである。

表2：総計（50問）の平均点・標準偏差・最高点・最低点

平均点	標準偏差	最高点	最低点
70.9	15.2	96	18

3.2. データの分析

3.2.1. 全体的傾向

3.1. の表2に示されるように、412名の平均点は70.9点になるが、この平均値は過去2年間実施した調査の結果とほぼ同じ水準と考えられる。⁴ 平成11年度実施分の平均点71.3点、平成12年度実施分の平均点69.3点と比較しても、大きな差はないと思われる。

3.2.2. 高・低正答率問題

ここでは、上記の全体的傾向を踏まえ、個々の問題について、正答率の高かった問題と低かった問題とを、それぞれ上位10項目について整理し、表3と表4に示す。

表3：正答率の高かった10項目

順位	問題番号	正答率	出題内容
1.	8	97.8%	関係副詞 where
2.	23	94.9%	比較級の表現
3.	18	94.4%	接続詞 neither
4.	9	91.5%	関係代名詞 which（主格）
5.	33	90.0%	仮定法過去完了
6.	7	89.8%	群前置詞 because of
7.	6	89.6%	関係代名詞 who（主格）
8.	2	89.1%	助動詞 would
9.	29	88.6%	動名詞（enjoyの目的語）
10.	36	87.8%	過去分詞の用法

表4：正答率の低かった10項目

順位	問題番号	正答率	出題内容
1.	1	16.1%	前置詞 to
2.	31	34.8%	仮定法現在
3.	16	39.8%	接続詞 since
4.	42	43.0%	特殊構文
5.	50	44.4%	文型 SVC (C は what 節)
6.	27	50.1%	未来進行形
7.	5	50.5%	群前置詞 in addition to
8.	38	51.1%	現在分詞の用法
9.	10	54.3%	前置詞 for
10.	40	54.5%	独立不定詞の用法

3.2.3. 文法項目別傾向

次の表5は、各文法項目における不正解数・正解数・正答率および全文法項目の平均正答率を、正答率の高い順に示したものである。

表5：正答率順文法事項

文法事項	不正解数	正解数	合計	正答率
関係詞	362	2110	2472	85.4%
比較	214	1022	1236	82.7%
動名詞	249	987	1236	79.9%
助動詞	343	1305	1648	79.2%
接続詞	572	1488	2060	72.2%
分詞	624	1436	2060	69.7%
不定詞	391	845	1236	68.4%
時間表現	666	1394	2060	67.7%
仮定法	408	828	1236	67.0%
文型	779	1281	2060	62.2%
特殊構文	477	759	1236	61.4%
前置詞	922	1138	2060	55.2%

この表5により、特に、前置詞、特殊構文、文型、および仮定法に関する問題の正答率が相対的に低いことがわかる。12の文法事項全体の平均正答率70.9%を下回っている文法事項は、前置詞、特殊構文、文型、仮定法の表現、時を表す表現、不定詞、分詞である。これは、過去2年間の調査結果とほぼ同じ傾向を示している。

では、次に、各文法事項の定着度をより詳しく検討する（各問題における選択肢の選択率は Appendix を参照されたい）。

3.2.4. 各文法項目の定着度

(1) 文型

文型に関する5問の出題の正答率の平均は62.2%であり、その内訳は、問題(43)SVについての出題が61.5%、問題(47)SVO (Oがif節)が71.0%、問題(48)SVO (Oがhow節)が71.1%、問題(49)SVOCが85.7%、問題(50)SVCが44.4%であった。

(2) 「時」を表す表現

「時」を表す表現についての出題内容と各問題の正答率の内訳は、問題(24)63.3% (現在完了形)、問題(26)73.3% (may+完了形)、問題(27)50.1% (未来進行形) 問題(28)87.1% (現在進行形)、問題(30)64.8% (過去完了進行形) であった。これまでの調査と同様に、問題(27)、問題(30)の正答率が他と比べて著しく低いのは、未来進行形や過去完了進行形がより複雑な形態をしているということ、使用される場面を踏まえたその機能についての理解が低いこと等により、十分な定着がなされていないことが考えられる。

(3) 動名詞

動名詞に関する出題については全般に正答率が高く(79.9%)、項目別比較で言うと上位から3番目である。その出題内容と各問題の正答率の内訳は、問題(22)73.5% (worth~ingの型)、問題(29)88.6% (enjoyの目的語の位置)、問題(39)77.4% (look forward to~ingの型) であった。誤答に関しては、(22)では、worth to read という誤った表現形式を選択した学生が15.5%もいたこと、また、(29)では、enjoy to make という形態を7.8%もの学生が選択したことが注目される。

(4) 不定詞

不定詞に関する出題全体の正答率は68.4%であり、その出題内容と各問題の正答率の内訳は、問題(40)54.5% (独立不定詞)、問題(41)71.7% (to-不定詞・形容詞的用法 something to drink の形)、問題(45)83.3% (to-不定詞・副詞的用法・判断の根拠の意味) であった。

(5) 分詞

分詞に関する出題全体の正答率は69.7%であり、適切な形の動詞を選択する形式と、文中の誤った部分を指摘する形式の2つの問題形式による出題であった。前者については、現在分詞(付帯状況の意味を表すもの)と過去分詞を用いた慣用的な分詞構文の出題で、それぞれ問題(21)58.7%、問題(25)73.7%の正答率であった。後者の形式による出題では、文中の分詞に関わる部分の誤りを指摘するもので、問題(36)make+oneself+過去分詞は87.8%の正答率でよく定着していると考えられる。また、主語(人または物)に合わせて、文の補語となる形容詞用法の現在分詞・過去分詞を使い分けが求められる出題(38)では、正答率がかなり低く、51.1%であった。

(6) 仮定法の表現

仮定法に関する出題全体の正答率の平均は67.0%であった。仮定法過去の構文の動詞を過去形にするというルールは定着していると思われ、仮定法過去における条件節の動詞や、wish の目的語となる名詞節の動詞を過去形にする問題では、両者とも高い正答率であった。また、問題(31)は、suggest に続く that 節中の仮定法現在の定着度をみるものであったが、正答率34.8%と極めて低く、主節の動詞の時制 (suggested) と that 節の中の動詞の時制を一致させたのではないかと思われる解答が全体の38.7%も見られ、正答率を上回った点が注目される。

(7) 比較の表現

比較の表現についての各問の正答率は、問題(23)94.9%、問題(32)84.8%、問題(37)69.3%であり、全体としては82.7%の高い正答率であった。ただし、問題(37)では、比較の対象となるものを同じ資格にして表現する点 (*The climate of Tokyo* と *that of New York*) が十分に理解されていないことがうかがわれた。

(8) 関係詞

関係詞については、関係代名詞 who (主格)、which (目的格)、whose (所有格)、what、関係副詞 where、when の語法に関する出題であった。全体としては85.4%の正答率で、定着度は高いと思われる。ただし、関係代名詞 what の用法に関する問題(15)の正答率は55.6%と低く、前置詞 with の目的語として名詞節 what I saw が機能しているという点が十分に理解されていないと考えられる。

(9) 助動詞

助動詞に関する出題全体の正答率は79.2%であり、その定着度は中程度と考えられる。問題(2)は、would rather ~ than... (…するよりむしろ～をしたい) という慣用的表現に関するもので、正答率は89.1%と高かった。これに対して、同様な慣用的表現が使われている問題(19) (may as well ~の構文) の正答率69.4%は決して高いとは言えない。慣用的表現に現れる助動詞の定着度にばらつきがあると考えられる。

過去の習慣・習性を表す would の用法を見る問題(12)の正答率は71.1%で、この用法の定着度が相対的に低いことがわかる。必然性・推量を表す must の用法の理解を見る問題(14)の正答率は87.1%であった。

(10) 接続詞

接続詞に関する出題全体の正答率は72.2%であり、全体として見るとその定着度は決して高いとは言えない。問題(3)、問題(4)、問題(13)、問題(20)の正答率は、それぞれ、75.0%、86.4%、79.1%、85.5%で、平均すると81.5%になり、この4つの問題に関する限り、接続詞の理解度は決して低くはない。全体の正答率を下げている要因は、問題(16)の正答率の低さ(39.8%)である。正解 since の代わりに、as soon as を選んでいる者(28.5%)や、even if を選んだ者(21.7%)がいることを考えると、主節と従属節の意味的つながりを表面的にしか理解していないのではないかと考えられる。

(11) 特殊構文

特殊構文に関する出題の平均正答率（61.4%）を見ると、この項目の定着率がかなり低いことがわかる。特に問題(4)の正答率は43.0%であり、慣用的表現（It is not until ~ that …）が定着していないと考えられる。

(12) 前置詞

前置詞全般についての定着度は、正答率54.2%から判断すると、かなり低いと考えられる。また、相対的に言えば、いわゆる群前置詞の用法より、単独で用いられる前置詞の用法の定着度が低い点が注目される。特に問題(1)の the answer to the riddle という慣用的前置詞の結びつきを問う問題では、正答率16.1%と、その低さが際立っていた。また、by means of~や for the purpose of~等の、群前置詞と呼ばれるものの意味の把握も十分にはできていないと考えられる。さらに、問題(3)において、while I was in Paris とすべきところを during I was in Paris としたものが全体の15.8%もいたことは、前置詞+句の表現、接続詞+節の表現という基本的なルールが十分には定着していないことを示唆しているものと思われる。

次に、各文法項目の相対的定着度をとらえるために、統計的分析（コ克兰の Q 検定）を行なった。表 6 はその結果を示したものである。

表 6：コ克兰の Q 検定表

総計量	自由度	1%点	5%点	P値
1030.4	11	24.7	19.7	<.0001

この検定表により12個の文法項目の定着度は一様でなく [$\chi^2(11)=1030.4, p<.0001$]、項目間によっては定着度の差があることが理解できる。では、どの項目間に差があるのだろうか。このことを特定するために、表 5 において序列化された文法項目に関してボンフェローニ（比率）による多重比較検定を行った。検定の結果、助動詞と接続詞の定着度や強調と前置詞の定着度の間等に統計的有意差（有意水準 1%）が認められた（前者に関しては、下限値と上限値がそれぞれ.0173と.1218で、また後者に関しては、それぞれ-.1196と-.0037になっているが、両者とも下限値と上限値の符号が同じで、しかも同時信頼域に 0 が含まれていない）。下記は、多重検定の結果を基に、3つのグループ（A・B・C）を用い、12個の文法項目の相対的定着度を直線上に表したものである（ただし、グループ内における各文法項目の定着度の差はここでは論じない）。

低 A（前置詞） B（特殊構文・文型・仮定法・時制・不定詞・分詞・接続詞） C（助動詞・動名詞・比較・関係詞） 高

文法項目の相対的定着度

4. まとめ

本調査では、長崎大学1・2年生の英語基礎学力を客観的に把握することをその目標とする「平成13年度英語基礎学力診断テスト」を実施し、そのテスト結果を分析した。分析の便宜上、12の文法項目に分類し、各々の定着率について検討した。今回の調査に関しても、過去2回の調査結果とほぼ同様な傾向が見られ、特に、前置詞に関わるもの、及び基本的動詞の用法に関わる文型・特殊構文・仮定法・時制・不定詞・分詞などの定着率が低いことが明らかになった。

今回の調査をもって、3年計画による長崎大学学生（全学教育英語科目受講1・2年次生）を対象とした英語基礎学力調査を終了する。この3年間の調査結果の細部にわたる分析結果については、また稿を改めて発表する予定である。

注

1. 本調査の実施に関して、長崎大学教育学部の池田俊也先生には多大なご協力をいただいた。この紙面を借りて心から感謝の意を表したい。
2. 本調査の英語基礎学力診断テスト問題作成に使用した言語材料は、以下の文部省検定済教科書から採用した。
SPECTRUM ENGLISH COURSE I, KIRIHARA SHOTEN, 1994.
ONE WORLD English Course I, KYOIKU SHUPPAN, 1994.
LEAGEND ENGLISH Reading, KAITAKUSHA, 1995.
MAINSTREAM READING COURSE, ZOSHINDO, 1996.
3. 本調査のマークシートの集計・処理にあたっては、情報処理システム（Sekonic SR-505 Mark Sheet Reader）を使用した。また、データの分析は、処理ソフトMicrosoft Excel（Version 5.0）およびエスミ社Excel統計（Version 5.0）を使用した。
4. 調査対象クラスの学部別平均点は、教育学部（67.0）、経済学部（64.9）、医学部（85.3）、歯学部（82.8）、薬学部（77.9）、工学部（60.4）、水産学部（67.3）であった。

参 考 文 献

- 小寺茂明・森永正治・太田垣正義. 1992. 『英語教師の文法指導研究』三省堂.
 垣田直己（編）. 1979. 『英語教育学研究ハンドブック』大修館書店.
 菅 民郎. 1999. 『EXCEL統計』のための統計分析の本』（改訂版）株式会社エスミ.
 高島英幸. 1995. 『コミュニケーションにつながる文法指導』大修館書店.
 田中敏・山際勇一郎. 1992. 『ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法』（新訂）教育出版
 肥田野直・瀬谷正敏・大川信明・遠藤健治. 1995. 『心理・社会・教育系のための統計入門』培風館
 リチャーズ J. 他 1988. 『ロングマン応用言語学辞典』南雲堂.
 Tomasselo, M. and C. Herron. 1989. "Feedback for Language Transfer Errors : The Garden Path Technique," *Studies in Second Language Acquisition*, 11, 385-395.

Appendix 各問題における選択肢の選択数および選択率（％）

	1 番の 選択数	2 番の 選択数	3 番の 選択数	4 番の 選択数	5 番の 選択数	合計	1 番の 選択率	2 番の 選択率	3 番の 選択率	4 番の 選択率	5 番の 選択率
問題 1	66	204	68	73	0	411	16.1	49.6	16.5	17.8	0.0
問題 2	13	4	367	28	0	412	3.2	1.0	89.1	6.8	0.0
問題 3	32	6	309	65	0	412	7.8	1.5	75.0	15.8	0.0
問題 4	45	1	10	356	0	412	10.9	0.2	2.4	86.4	0.0
問題 5	207	60	126	16	0	410	50.5	14.6	30.7	3.9	0.0
問題 6	10	369	27	6	0	412	2.4	89.6	6.6	1.5	0.0
問題 7	11	370	11	20	0	412	2.7	89.8	2.7	4.9	0.0
問題 8	1	6	2	402	0	411	0.2	1.5	0.5	97.8	0.0
問題 9	13	2	376	20	0	411	3.2	0.5	91.5	4.9	0.0
問題10	222	160	23	4	0	409	54.3	39.1	5.6	1.0	0.0
問題11	21	4	41	346	0	412	5.1	1.0	10.0	84.0	0.0
問題12	67	293	34	18	0	412	16.3	71.1	8.3	4.4	0.0
問題13	65	14	7	326	0	412	15.8	3.4	1.7	79.1	0.0
問題14	3	15	35	359	0	412	0.7	3.6	8.5	87.1	0.0
問題15	22	77	83	228	0	410	5.4	18.8	20.2	55.6	0.0
問題16	117	41	89	163	0	410	28.5	10.0	21.7	39.8	0.0
問題17	22	88	273	27	0	410	5.4	21.5	66.6	6.6	0.0
問題18	3	389	9	11	0	412	0.7	94.4	2.2	2.7	0.0
問題19	11	108	286	7	0	412	2.7	26.2	69.4	1.7	0.0
問題20	13	46	334	17	0	410	3.2	11.2	81.5	4.1	0.0
問題21	5	130	242	35	0	412	1.2	31.6	58.7	8.5	0.0
問題22	64	303	37	8	0	412	15.5	73.5	9.0	1.9	0.0
問題23	3	0	18	391	0	412	0.7	0.0	4.4	94.9	0.0
問題24	54	28	69	261	0	412	13.1	6.8	16.7	63.3	0.0
問題25	302	20	66	22	0	410	73.7	4.9	16.1	5.4	0.0
問題26	17	48	45	302	0	412	4.1	11.7	10.9	73.3	0.0
問題27	205	56	103	45	0	409	50.1	13.7	25.2	11.0	0.0
問題28	13	7	359	33	0	412	3.2	1.7	87.1	8.0	0.0
問題29	32	7	8	365	0	412	7.8	1.7	1.9	88.6	0.0
問題30	55	52	267	38	0	412	13.3	12.6	64.8	9.2	0.0
問題31	143	159	29	56	24	411	34.8	38.7	7.1	13.6	5.8
問題32	11	347	23	21	7	409	2.7	84.8	5.6	5.1	1.7
問題33	20	370	4	16	1	411	4.9	90.0	1.0	3.9	0.2
問題34	8	324	53	25	0	410	2.0	79.0	12.9	6.1	0.0
問題35	5	315	3	85	0	408	1.2	77.2	0.7	20.8	0.0
問題36	10	23	17	360	0	410	2.4	5.6	4.1	87.8	0.0
問題37	59	11	49	7	284	410	14.4	2.7	12.0	1.7	69.3
問題38	30	53	116	208	0	407	7.4	13.0	28.5	51.1	0.0
問題39	3	2	319	41	47	412	0.7	0.5	77.4	10.0	11.4
問題40	118	224	40	3	26	411	28.7	54.5	9.7	0.7	6.3